

だしました。申し訳なさと悲しさに、人の迷惑も考えず大きな声で泣きました。仲間と一緒にお念仏を唱えました。

自分たちの住んでいた所にも行きましたが、山の墓地だったけれど分ならず、見当をつけてお念仏を唱えました。野菊の咲くころ、子供の手をひいて何度か来たのに、何十年もたってしまっただけでぜんぜん分かりませんでした。

すべては変わっております。立ち直ってみんな明るい顔をして働いておりました。大陸はカラリと晴れわたり、街も今では何事もなかったような落ち着きをみせ、皆さんは笑顔で迎えてくれました。

平成九年四月二十日、地元北上市の慶昌寺において供養会を行い、全国から十四人参加、お勤めをしていただきました。引揚げ後から七回目の供養会となり、引き揚げてくるときは、六歳から八歳だった子供たちも六十歳前後、私は七十三歳、主人は八十一歳となり皆高齢となりました。

何のために戦争をしたのか、何のためにあんなに苦

しんだのか……。二度と戦争はするものではない」と改めて感じました。世界の人はみな仲良くあるべきなのです。

地獄から這い上がって故郷へ

岩手県 竹内 嗣 欣

海外居住の動機

昭和三年二月十五日、私は長野県下伊那郡上郷村飯沼に生まれた。

昭和十二年の暮れ、父が支那事変に召集され、支那大陸にて戦闘をして、昭和十四年秋ごろ除隊帰還してきた。

自作地が少ないので、小作にて農業をしていた。當時国策により満州開拓移民が盛んに行われていて、大陸を見てきた父は、狭い日本の小作農業では物足りず、満州へ行くことを思いたち、昭和十五年満州国吉林省舒蘭ジョラン水曲柳スイキョリウ開拓団の第三次移民団要員として、一年

間渡満して団地の取得などをして帰り、昭和十六年三月、私が上郷尋常小学校の高等科一年を終了してから、一家で正式に移民することになった。

入植したところは小硬屯というところで、私はそこで水曲柳尋常高等小学校の高等科二年を卒業し、引き続き青年学校に入り、昭和十七年の三月に卒業した。卒業後は父と共に、開拓事業で毎日毎日働いていた。

終戦直後

昭和二十年八月初めごろ、畑で耕作をしていると、女子供が乗った汽車が南下して行く。毎日のことで、それを見送りながら、いつもの通り暮らしていた。その年は大雨で、畑や部落の低い所は浸水し、家の中まで水が入り鮒なが泳いでいる有様だった。

終戦の一日前のことである。満人たちの様子がいつもと違っている感じがしていたところ、終戦の連絡が入った。十六日であったと思う。平沢さんがきて、日本は負けたとのことで、これからは各部落で団結してやってもらいたいとの話があり、皆で会合を開き、今後のことについて相談した。

仕事も手につかず、その日暮らしであった。そのうち、団本部のある水曲柳方面では暴民の襲撃が始まったとのことで、部落でも集結することとなり柳沢さんの家を事務所にした。警備銃を持ち、每晚部落の外の警備をするが、そのうちに房身ホウシニコウ方面でも襲撃が始まったとのことだった。

九月十日、竹村・平沢・仲田さんが連絡にきて、房身崗へ集結するようにとの話だが、皆で相談の結果、小硬屯の者たちはここにとどまることになり、筒井・福沢さんらはここから動かないということとでこれからの対策を練った。龍さんも心配してくれ、朝早く溪浪河へ行って隠れていれば、夜迎えに行くからということとで、夜、龍さんの家に衣類を麻袋に入れて運ぶことになった。

十一日朝暗いうちに筒井・福沢・大平・熊谷・松沢さん一家と弟たちと溪浪河へ行った。筒井さんのところの照ちゃんがこないで、熊谷さんが部落へ見に行っただがないとのこと。そのころ部落の中は大騒ぎだった。というのは、龍さんの子供が松沢さんの家へ行き、

中で警備をしていたところ、外から太股を槍で突かれ大けがをしてしまったからだだった。

他の人たちは哈爾濱へ行くことになって支度をしている。最後の相談をしたが、筒井・福沢・大平さん一家は残って部落へ火をつけて自決する覚悟であった。

熊谷・松沢さん一家と弟二人は部落へ帰ることになり、熊谷さんが送って行った。頼りにしていた龍さんは、子供のことでもう頼れないということになり、明るくなってきたので溪浪河から部落へ近づき、龍さんの墓場までたどりついた。そのころ部落を遠巻きにしていた暴民たちが動きだしてきて、皆が哈爾濱に行くのを待っていた。

同胞の自決

忘れもしない、時は昭和二十年九月十一日夕刻五時ごろ、広漠たる高粱・とうもろこし畑の西の彼方には真っ赤な太陽が沈みかけ、南東の線路には水曲柳方面から平安駅に向かい、房身崗地区の同胞集結者に乗せ哈爾濱へ行く列車が、黒煙をはきながら呼蘭河の鉄橋を平安駅へ走って行く。しばらくして警笛を鳴らし、

三河屯に向かい遠く列車が去り行くのを見送った。

熊谷さんと私、そして自決を決心した人たちと一緒に、最後の集結地となった龍さんの墓場に行く。蜂の巣をつついたような状態で、手に手に槍や棒を持った子供から年寄りまでも一緒の原住民の大包囲網の中で、福沢家（五人）、筒井家（五人）、大平家（四人）の家族十四人が最後に選んだ道は「自分たちは満州開拓に骨をうずめるためにきたのだから、ここで死を決する」とのことだった。その開拓者魂が生と死の分かれ道となったが、親の意思で決まったこととはいえ、その家族の特に将来のある若い方たちの心境はいかばかりであっただろうか。最後に残された言葉は、終戦前に召集された夫や息子、また親戚の者に、もし内地へ帰れたときには、この現状をここに至った心境をぜひ伝えてもらいたいとの悲痛な願いであった。皆さんの最期を涙ながらに見届けた。

福沢さん一家、筒井さん一家、大平さん一家が一緒に並び、この世の別れに各々の思いを胸に、合掌して死を待っている。筒井さんが一人一人の介錯をしてい

く。次々に前に倒れ鮮血が飛び散り、たちまち地面は真っ赤に染まっていく。ただただなすすべもなく、言葉に表せない気持ちで皆さんの冥福を祈り、現況を見守った。最後に筒井さんを熊谷さんが介錯した。私は大平さんの幼児（三歳ぐらい）を楡の木の枝に縄を掛け、「おかあさん！」と泣き叫ぶのを心を鬼にしてお別れした。

皆さんの最期を見届けた後、後ろ髪を引かれながら冥福を祈り、誓いのことを伝える決意で別れを告げ、一寸先は闇の、果てのない逃避行が始まった。熊谷さんと二人、日本刀と短刀をそれぞれ持ち、夜になったら部落へ行き状況を見届けることとし、最期は自決と覚悟して高梁畑を徐々に村落へ近づき始めると、遠巻きに包囲された。中から大声で叫びながら朋友の孫さんらが五、六人で、おそろおそろ自分たちの方へ歩いてくる。話の内容は、とにかく刀を渡してくれば二人の生命は保証するからとのことであった。相談の結果、孫さんらを信用し刀を渡すこととし、近づいて彼らに刀を渡すと、次の瞬間、遠巻きにしていた原住民

たちが一斉にこちらへ向かって移動してきた。孫さんらは大声でそれを止めようとしているが、何の効果もない。

考えてみれば、日本は国策といいながら満州に來たり、原住民の住まいを追い出し生活してきたのだから、包囲網の住民の中にはその恨みがある人たちもいるので、その心は分かるような気もする。私たちはその現況を見、命があったらまた会う約束をして、各々逃避した。

どちらへ行ってもあまりにも多い人垣である。衣服のはぎ取り、略奪が始まる。彼らとはにかく衣類が欲しいのである。しばらく高梁畑を逃げまわったがついにつかまり、軍靴脚絆のいでたちであったので観念して地面に腰をおろし、片方の軍靴を脱ぎ人垣の中へ投げ、もう片方も同じように投げた。そのとたんに寄ってたかつて、住民に服・シャツをはぎ取られた。皮をむかれた白うさぎと同じで、我が体は宙に浮いて、何回も引つ張られた。服・シャツの両袖はちぎれ、だんだん裸になっていく。ズボンも脚絆を巻いているので

どうにもならない。そこで皆に話をして片方ずつ脚絆を取り人垣へ投げた。物を持った者は去って行く。ズボンをはぎ取られ、最後にはふんどしまで取られ、丸裸となった。

夕日は沈み寒さが身にしみる。無我夢中であった。あまりにもみじめな我が姿にしばし放心状態であった。気がつくと、物取りを終わった住民たちは三三五五、高粱畑を去っていく。中には満州独特の小足の靴を歩いてよちよち歩く老婆や、子供たちの姿もあった。この時初めて戦いに負けたということを、身をもって体験した。戦争は絶対行っではない。

我に返り見知らぬ一人の中年の男性に語りかけ、「ズボンをくれ」と言うと、丸裸の姿に心を動かされたのか、三枚はいていた夏用ズボンを一枚脱いでくれた。地獄の中の仏の如く感じた。人種は違っても心が通じて有り難かった。

遠くの方でワァーワァーと声が聞こえてくる。このままでは仕方ないと思い、近くの開拓道に出て歩いていると、向こうの畑から同じ姿の熊谷さんが出てきて

再会した。虚脱感におそわれ、しばらく二人とも無言で道路に座り込んだ。日が暮れ始め薄闇が迫るちょうどそのとき、父の知人の保安屯の屯長が通りかかり、平安駅の前に日本人が集結している、そこに父母たちがいるかもしれないとの話を聞いたので、部落横の道路を呼蘭河の鉄橋に向かい歩き始めた。

道中は立ち去った部落の方たちが食料として持参した炒米・炒豆などが散乱し、写真は目玉がくりぬかれ、悲惨そのものであった。

その年は長雨が続き、湿地など低い所は水かさが増している。いつも歩いていた道路も膝まであり、二人は平安駅へ行くため呼蘭河の鉄橋にのぼる。そのころ部落の方から盛んに銃声が聞こえてきた。鉄橋を渡り始め、ちょうど橋の中ごろにきたとき、水曲柳側で大声で「人殺しだから捕まえろ」と叫んでいる。平安駅側には当時、呼蘭河の流木の集結のため中国から山東人たちが労務にきていた。その人たちが棍棒を手に手に待っている。絶体絶命の状態になる。河を見おろせば、赤土色の濁流が音をたてて流れている。最悪の場

合は河へ飛びおりにすることにするが、とにかく目的地は平安駅なので、先へと歩く。橋を渡り終えた所で、山東人が棒を振り回してきた。その間隙を通りぬけ、線路の上をはだして走った。十日ぐらい前にけがをした足の指を破傷風で治療中であつたが、痛さも何も感じない。九死に一生の思いで、夢中であつた。追手が来なくなつたので、後ろを見ると、熊谷さんが湿地の中ほどで包囲されている。少しして、話し合いがついたのか駅に向かって歩いてきた。しばらくしてまた再会する。人目を避けるため、駅郊外に集積された木材の中を胸まで水につかり、合間合間を通り抜け日本人の集結地に入った。

話をすると、水曲柳の人たちではなく、城子河開拓の人たちであつた。日は暮れ薄闇になっている。代表者に事情を話し一緒にしていただいた。ちょうど夕食時であつた。皆の厚意により少ない食料を分けていただいた。

夏ズボン一枚きり、その上に濡れているので寒さは身にしみる。焚火をしてくれたので乾かし、その夜は

その横で一夜を過ごした。

二日目のことだつた思うが、皆明朝、吉林へ向け歩いて行くことになつた。朝三時ごろ、バラ線の囲いの中から脱走し歩き始める。呼蘭河の上流を渡り水曲柳へ入り、房身崗をへて開拓道路を吉林へ向け歩いた。

ちょうど昼ごろ朝揚屯まで来たとき、後ろから馬に乗つた保安隊が空砲を打ちながら追つてきて、帰れとのことで保安隊の警備の中また平安へ引き返し、その日はそこで過ごした。

どう連絡がついたのか龍さんが来て、夜迎えにくるから柵から逃げてこいとこの打ち合わせで、夜警備のすきを見てバラ線の囲いから二人とも出て、龍さん宅へ帰つた。一家皆で無事を喜び迎えてくれた。龍さんの隣は、亡くなられた筒井さんの住宅で、乳牛もそのままいたので、これから当分は外へ出ないで、そこで過ごせばよいからということになり、毎日毎日牛乳しぼりなどを手伝いながら日々を過ごした。

そのうちに豆腐作りを始め、その手伝いなどをした。私たちがいることを知り、松下誠さん、松下のばあさ

ん、息子、久保田兄弟、松代かずえさんなどが訪ねてきて、皆一緒に暮らすようになった。

十一月ごろには治安も良くなり、大豆、高粱、稗、粟などの脱穀の手伝いもできるようになり、十二月二十日ごろまでの三カ月余り、龍さん一家の厚意に甘え暮らすことができた。今ある自分の幸せを思うと感謝の一念である。

龍さんの話によれば、自決された方々も衣類ははぎ取られ丸裸になっていたので、有志の方々により開拓道の近くの水田のそばの空地に埋葬したとのこと。現場を見に行き冥福を祈り、最後の誓いを果たすべく心に決め、お別れした。

水曲柳同胞と弟たちとの再会

十二月中旬ごろ龍さんから話があり、保安屯ホアノトの屯長（父の朋友）さんが正月前に新京へ米を運んで行くから、一緒に馬車に乗せてくれるとのことでした。出発は二十日ごろになるので準備をするようにと言われ、龍さんの奥さん、嫁さん、娘さんが急遽冬の満服、帽子、靴など、熊谷さんと私の二人分を用意してくれ

た。

道中は五、六日かかる予定で、出発は二十三日ごろだったと思う。九月十五日ごろから親身になって世話をしていた龍さん一家とお別れの日がきた。道中腹が減ってはと二人にお金も渡してくれた。

人種は異なっても、敗戦を知らない私たちにいろいろとアドバイスをしてくださり、特に先祖の墓場を汚したことについても「没法子（仕方がない）」と言って寛大な気持ちで終始お世話をいただいたことに対し、万感胸にせまる思いだった。何の恩返しもできず去るのは心残りだったが、本当に感謝している。龍さんからは「ツウネイ（父のこと）には世話になった」といっても聞かされていた。またいつか会える日を約束し、一家の皆さんと固い握手を交わし出発した。

同行した人たちは、龍さんの家（筒井さん宅）に世話になっておるときに、訪ねてこられた方々だったと思う。道中冬にて寒さも厳しく、馬車に乗り、揺られながら、時には降りて歩いたり、長い道のりの始まりだった。休む暇もなく、五、六頭立ての馬車四、五台

にて鞭を鳴らしながら、昼夜を問わず走らせた。二日目、部落の名は分からないが、同級の林五郎君に出会った。話をすると当分ここで働くとのことであった。

道中の各部落の中でも悪い所があると、中央の道路を通るときは、入口から出口まで走り通して通過した。

三日目の夜が良い部落で、その夜はその宿へ泊まることになった。夕食時に屯長さんから話があり、皆は口がきけないということで話はしないようにということだった。部屋で休んでいると、宿の外が賑やかになり保安隊の連中が三人ぐらゐり入口から入ってきて、「日本人がいるはず、人殺しをして逃げているから取り調べる」と言いながら、一人残らず調べてくる。いよいよ自分たちの所へくる。黙っていても日本人だとすぐ分かり、安全装置を外したまま引き金に手を掛け、銃口を胸に突きつけ頭の上から靴の中まで調べる。女性二人は髪の毛の中で調べられるが、何もあるわけがない。屯長さんが理由を説明し、何とかその場の難を逃れその夜は眠った。

次の日早朝出発した。五日目の夜、ある部落にて泊

まることになったが、その部落には元朝鮮の人たちも住んでいて、その夜はそこでお世話になった。いろいろ話もでて、日本に友好的な方たちで一夜を過ごさせてもらった。次の日も早朝そこを出発。だんだん新京に近づいているようで、レンガ積み建物が目に入る。戦闘をした後なのか、途中の道路わきには日本人の兵隊たちの死骸があちこちに散らばり、丸裸の手足などがキツネかオオカミに食いちぎられ、所々に散乱していた。湿地の中ほどには風船のようにふくらんだ死骸が無数に浮いている。全国から戦に召集され、いまだに帰らぬ兵士たちを待ちわびる家族の皆さんの気持ちを察し、この現状を目の当たりに見て、何ともやりきれない気持ちで、この中にも身内の人がいるかと思えば胸の痛みを感じつつ、冥福を祈り通り抜けた。市街地がだんだん近づき始めた。

六日目の早朝、太陽が昇り始めたころ、目的の新京市場へ皆無事到着した。お世話になった屯長さん一行に深く御礼をして、いよいよ皆がいる南大房身の兵舎に向かった。兵舎に着いたのは十時ごろだったと思う。

小纒屯の人たちがいる部屋へ入り、二人で挨拶をした。皆で無事の再会を喜び、尽きぬ話で泣き笑いであった。話によれば、二人はもう死んだものとのことで、二人とも水曲柳開拓団の合同慰霊祭にて仏になり、位牌が押入れの棚に飾られ花や線香が上げてあった。

これからは、一度死んだ体、もう一度生まれ変わった気持ちで頑張るといふ決意をした。弟たちは房身崗の武村さんのおばさんなどが面倒を見てくれて、隣の部屋で暮らしていた。それから兄弟三人、共にお世話になった。一部屋二十五人ぐらいの人員で、合宿生活であった。この部屋は房身崗の方たちが主で、武村さん一家、武村徳一さん及び栄人さん、北原さん一家、小杉山さん一家、武村フサさん一家、名古屋のおばさん、新潟の小竹さん、私たち兄弟で暮らした。

働ける人たちは各々の担当部署につき、外に出た。夕方帰ると団から配給になる高粱を一升ビンでつき、皮を取った御飯か、キビ粉の饅頭が夕食であった。後になってから、私が飛行場の使役に行くようになり、帰りにロシア系の余りのスープを飯盒に入れ、パンの

残りがあればもらってきて、部屋の皆と分け合っていた。夕食後は電灯の下でシラミ退治である。寝るころには、六畳、八畳各一部屋と押入れの下端に体を寄せ合って休んだ。日がたつにつれ自分も内容が分かり、近くの満人部落への使役、市街への味噌麹などの販売、ソ連軍の飛行場で炊事の芋洗いなどを行った。

いつまでいるのか分からない毎日。明日のことを忘れ、今日一日が皆無事で過ごせた喜びを味わいながら、その日その日の生活を送った。

時には薪木取りに空いた官舎へ夜行き、合掌（山形に組み合わせたもの）などを持ってくることもあった。九死に一生を得た思い出は、四月初めごろのこと。

三、四人の若い人たちが近くの部落へ行ったときである。官舎を出て近くの道路に来たとき、いつもと様子が違った。気にすることなく目的の部落へ入ると、昨日と部落内の様子が全然違っている。そこには八路军の兵士たちがいて、住民たちは塹壕掘りをしている。私たちもその手伝いで一日過ごした。夕方帰る時間がきたので話をした。八路军の宣撫班の人たちらしく、

軍隊へ入れといろいろ条件をつけて盛んに勧誘する。隊長に今日働いた金を持っていかないと、父・母・子供たちが御飯が食べられないと当方の事情を話すと、納得して部落を出してくれた。

日は暮れかけ薄闇が迫ってくる。大変なことになったと語り合いながら、朝通ってきた道路に出たときである。緑園の丘から銃声が聞こえた。こちらは正規軍の方である。やむを得ず近くの壊れた官舎の中へ逃げ込んだ。前方には団の宿舎が見えている。付近の様子をうかがいながら、とにかく帰ることだと官舎から出て十五メートルぐらい進んだとき、いきなり機関銃の一斉射撃が始まった。もう前にも後ろにも行けない。少しでも低い地面を見つけその中に体をうずめる。二、三メートル前のくぼみへ動くと機関銃の弾が飛んでくる。伏せている五十センチ前や両横に土煙が上がり、いつ体に当たるか分からない。しばらく様子を見る。日は暮れ薄暗くなってきた。日前の宿舎の窓から皆が顔を出し、心配そうに状況を見守っていてくれる。そのうちに、団から正規軍に連絡がついたのか、緑園の

銃声も止み、やっとの思いで部屋に帰った。これで三回目の命拾いをした。

引揚げ前後の状況

昭和二十一年三月二十三日ごろには、新京からソ連軍が引き揚げていった。代わりに四月の中ごろ、今度は新京の飛行場に中共軍が入ってきた。その後新京全体を中共軍が占領していたようだが、五月になって中共軍は新京から撤退し、今度は国府軍が入ってきた。入れかわり立ちかわりの占領で、新京市内も混乱していた。

六月十五日、開拓団の慰霊祭が新京で行われた。その際に大慰安会もあり、ほっとした気持ちになっていた。

七月一日、待ちに待った日本への帰国が決まり、七月八日午前十時に南新京駅に集合するように指示され、その際私たち三人に二千円のお金が渡された。

予定どおりに七月八日の夕方五時に汽車に乗り南下した。九日には奉天北停車場に着いた。途中大きな事故もなく、これで日本に帰れるという気持ちでいっぱい

이었다。翌朝錦州に着いて待機場に連れていかれた。コンクリートの倉庫だった。若い者は使役に駆り出されて壺蘆島に連れて行かれ、夜通しドラム缶の荷積み作業をやらされたが、苦にならなかつた。錦州から壺蘆島に移動し、乗船の順番待ちのため数日待機、ようやく七月十四日に引揚船に乗船した。

ちょうど六日間の船上生活、七月二十日大竹港に接岸、DDTの消毒や防疫検査などがあり、その日は収容所に入れられた。大竹駅から懐かしい故郷飯田に向かったのは、七月二十二日の午後であった。

故郷は、心は暖かかった。飯田駅には村の方々や関係者が出迎えてくれた。すぐに兄弟三人、母の生家の北原に帰った。先に帰国していた下の弟と涙の対面をし、その夜は積もり積もった話で夜の更けるのも忘れて語り合った。

昭和十三年三月、一家を挙げて満州へ開拓団員として、大きな夢と希望に胸をふくらませて渡満した五年余のことが、夢のように、また走馬灯の如く頭の中を駆けめぐっていた。朝まで寝ることができず、帰国第

一日の夜が明けた。

それからまた、戦後の開拓生活が始まった。岩手県の本木上郷の開拓に半生を捧げて、本年で五十年を迎えた。

平成六年三月二十八日、長野県飯田市下久堅柿の沢の地に「水曲柳開拓団殉難犠牲者慰霊之碑」が建立され、亡くなられた十四人の方たちの名簿をその中に入れ、永久供養されることになった。今も昨日のこのようにまぶたに浮かぶ。亡くなられた方々の遺言の真実を記すことにより、冥福が祈れると思っている。

私の引揚げ体験記

岩手県 藤澤 正 一

一 渡満の動機

私は、昭和九年に盛岡市に所在する岩手県立盛岡農学校を卒業して、県の職員として平穩な毎日を送っていた。昭和十二年の春に、当時満州国の吉林省農林科